
シスター

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

シスター

【Nコード】

N8025A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

自分のいる学園の中等部で教育実習を受ける大学生。受け持っている女の子の相談を受けて教会に入るとそのシスターに心を奪われ今度は自分が、プロテスタント系の大学をイメージして書きました。

第一章

シスター

恋は熱病というのはフランスの作家スタンダールの言葉だった。急にやって来てそして誰彼なしに襲い掛かって苛む。それに取り憑かれたら最後までどうしようもなくなる。起きても覚めてもそのことばかり考えて他のことには目がいかなくなってしまう。何時去るのか、その熱病が更に悪化するのかさえわかりはしない。こればかりはどうにかする薬もないしその相手すら誰になるのかさえわからない。かかったら最後だ。それでかかった者は男でも女でも朝も昼も夜もうなされる羽目になる。それが恋というものの恐ろしさだ。恋はかかる者もそのかかった者が愛する相手も選びはしない。それは時としてとんでもない相手になることがある。しかしそれでもどうにもならない。恋にかかったらそれで終わりなのだ。

長い歴史を持つある街にその大学はあった。プロテスタント系のこれまた古い歴史を持っている学校だ。創設者は何でもアメリカでキリスト教の洗礼を受けて来たらしい。信仰心が篤く生真面目で心優しい人物だったという。

その彼が創設した大学にその若者はいた。名前を小野修治という。法学部にいるごくありふれた学生だった。背も特に高くはなく、髪は少し長くて顔は細面である。目は少し茶色がかっている黒でそれがほんのちよつとだけ日本人離れしているようにも見えた。けれど父親も母親も純粋な日本人でその顔は完全に父親似だと言われている。身体つきは細くてあまり筋肉はない。要するに優男だ。何処にでもいるような平凡な大学生でアパートから大学に通っている。

その修治がこの熱病にかかっている張本人であった。この病には常に相手が存在する。その相手が何よりも問題なのであった。

「どうにかならないかなあ」

彼は礼拝堂を覗き込んでこう呟いた。その向こうには一人のシス

シスター

ターがいた。

「やっぱり。幾ら何でも難しいよな」

彼は呟いて溜息を吐き出すだけであつた。彼が恋焦がれているのはそのシスターなのであつた。

キリスト教の大学なので当然シスターといったものも存在する。

彼女はこの大学に務めるシスターであり大学の神学科の卒業生でもある。修治の先輩にあたるのだが彼はそれはあまり気にはしていなかつた。問題は彼女がシスターであるということなのである。

この大学はプロテスタントなのでカトリックのそのように一生独身でいなければならぬというものではない。プロテスタントの創始者であるマルティン・ルターは元修道女と結婚して六人の子供をもつている。その一生から激しい気性の持ち主であると思われ易い彼であるが意外にも子煩悩な父親であつたという。だがそれでも中々言いにくい相手であるのは変わりがなかつた。

「シスターが相手なんて」

そのシスターの名はミカエラという。楚々とした外見と華やかな容姿を併せ持つており、小さな顔は白く、そしてシミも汚れもない鼻も目も整つており、口は小さい。目は大きくて二重の瞳がその顔によく合つている。修治は大学に入って彼女を見るなり心を奪われってしまったのである。

「どうにかならぬのかなあ」

だが告白することはおろか話をするこゝろさえないでいた。ただ遠くから見ていただけであつた。それが非常にもどかしいがどうにもなるものではない。それがかえつて彼を悩ませることとなつた。熱病は彼を袋小路に追い込んでいたのであつた。

彼は溜息をつきながら礼拝堂を覗き込んでいる。そんな彼に後ろから声をかける者がいた。

「これ」

「は、はい」

慌てて背筋をピンと立てる。それは年老いた男の声であつた。

「この大学の学生さんとお見受けしますが。何の御用ですか」

それは牧師の声であった。振り返れば丸眼鏡をかけた温厚そうな顔の牧師がそこにいた。そして修治に声をかけていたのであった。

「ぼ、牧師様」

「礼拝堂を覗いておられるようですが。何かあるのですかな」

「い、いえ別に」

傍目から見てもかなり怪しい態度であった。修治は必死に何かを打ち消していた。

「何でもないです」

「そうなのですか？」

牧師の声は疑うものではなかったがやはり警戒するものがあつた。

「礼拝堂には誰が入ってもいいです」

「はい」

修治は狼狽を残したまま頷いた。

「ですから。覗かれる必要はありませんよ」

「それはわかっていますか」

「わかっていますか？」

「いえ、何でもないです」

修治は答えようとしたがそれを止めた。

「何でもないです」

そう言つてその場を立ち去つた。そしてそのまま礼拝堂から逃げる様にして消えたのであつた。

修治はどうしてもシスターに自分のことを伝えることはできなかつた。何と言えはいいかわからず、戸惑っているばかりであつた。その名前すら聞いてはいないし、ただ遠くから見て溜息をつくばかりであつた。そんな自分がもどかしくて仕方なかつたがだからといって何をしたいのかもわからなかつた。彼は完全に手詰まりとなつていた。

そんな彼であつたが実は今大学で教育実習の研修を受けていた。場所はこの大学と同じ学園の中等部であつた。彼はそこで社会科の

実習を受けていたのである。

「それでここは」

彼は教員の監督の下研修を行っていた。授業自体はつつがなく行い、その評価は高かった。生徒からの評判も上々であった。

「中々いいじゃないですか」

指導官である年配の教員からも言われた。

「筋がいいというか」

「有り難うございます」

彼は職員室で話を受けていた。先程の授業がよかったと褒められているのである。

「このままいくと立派な先生になれますよ」

「はい」

「先生になられるのですよね」

「ええ、出来れば」

彼は答えた。

「そうなりたいとは思っています」

「うんうん、それはいいことです」

指導官の先生はそれを聞いて満足そうに頷いた。

「ではそうなられるのを楽しみにしていますよ」

「はい」

幾分か社交辞令が入っていたがそれでも修治の実習が高評価なのは事実だった。彼は寝る暇も惜しんで勉強し、そうした評価を掴んでいたのだ。そんな彼を学生達が慕うのも当然であった。

「先生」

授業を終えて廊下を歩いている彼にそんな学生の中でもとりわけ小柄で可愛い女の子が声をかけてきた。栗脇華子という。

「何かな」

「わからないところがあるんですけど」

「？何処かな」

彼はそれに快く応えて自分が手に持っている教科書を開く。教師

として合格と言える対応であつた。無能で怠慢な教師ならばここで自分でやれ、という。そうした輩はそもそも教師になること自体が間違いであるが。

「ここです」

華子はその小さい身体を必死に伸ばし自分の教科書を開いて尋ねる。見ればその教科書は重要な部分の所々に赤いペンでマークがされていた。真面目な生徒であるのがわかる。

「ここが。よくわからないんですけれど」

「ああ、そこはね」

修治がそれを教える。丁度彼のよく知っている部分だったので教えること自体はスムーズにいった。

「これでわかったかな」

「はい」

華子は清らかな声で返事をした。

「有り難うございます」

「よし。それじゃあね」

修治は別れようとする。だがそんな彼を華子はまた呼び止めた。

「あの、待って下さい」

「？まだ何かあるの？」

「はい、少し」

急に華子の様子がおかしくなった。

「あの、実は」

華子のもじもじしながら言った。

「廊下じゃ何ですから放課後に」

「放課後に？」

「学校の教会まで来て頂けないでしょうか」

「ああ、いいよ」

修治は特に考えることなくそれに応えた。

「それじゃ放課後にね。中等部の教会で」

「はい、お願いします」

華子はそれを聞いてすぐに修治の側から姿を消した。修治はそんな華子の様子を見て妙な感触を覚えていた。だが今は次の授業のことについて考えなければならず、注意はそちらに向けられた。華子について考えられるようになるのはとりあえずは放課後まで待たなければならなかった。

そして放課後になった。修治は次の日の用意を済ませた後で中部の教会に向かった。向かいながらあれこれと考えていた。

「一体何なんだろう」

彼女が何ついて相談したいのか。まず考えた。

「勉強のことじゃないみたいだし」

それはもう廊下で終わっていた。

「生活のことかな？けれどそれは」

その為に担任がいる。もっともそういったことを話すのに値しない教師も中にはいるが。

「違うよなあ。じゃあ一体」

ここでふとあることに思い至った。

「まさか」

修治の顔に苦いものが走る。

「それはよくないぞ、若しそうだとしたら」

華子が自分のことを想っているのではないのか。そう考えたのである。

「僕は教える立場だ」

彼は言った。

「そして彼女は教えられる立場だ。教師と生徒なのにそんなことがあつてはやっぱりまずいよな」

かなり勝手な考えであつたがこの時彼はこれを真剣に悩んでいた。

「若しそうだとしたら断ろう。それが彼女の為だ」

そう決心した。それに相手はまだ中学生だ。何かあつたらお互いが不幸になる。彼はそう思い今回は彼女を教え諭して拒むつもりであつた。そうした分別はあつた。

「よし」

意を決して教会に入る。外見と中身は大学の教会よりも新しかった。その為悪い印象は受けなかった。

教会の扉を開ける。するとそこにはもう華子がいた。席の最前列に座っていたが扉が開かれる音と差し込んで来た明かりで顔をこちらに向けてきた。茶色い教会の中がその光によって照らされる。それと共にキリストがかけられた十字架の後ろのステンドガラスが複雑な光を放って修治と華子を照らしはじめた。

「先生」

華子はその差し込む日の光とステンドガラスの輝きの下で立ち上がった。そして修治に声をかけてきた。

「来て下さったんですね」

「うん」

修治は意を決した顔で頷いた。何かあってはいけない。

「実は相談に乗って欲しいことが」

「何だい？」

ここで扉を閉じては何かあった時にまずい。そう思い扉はわざと開けたままにして華子の方へ向かう。茶色い教会の上は白く、それも目に入った。

「実は」

「うん、実は」

彼は華子の一挙手一投足に神経を集中させていた。

「悩んでいることがありません」

「何かな」

ここで彼は華子に問うてきた。次には何を言ってくるか、それに注目していた。

「私、悩んでいるんです」

「どうやらそうみたいだね」

その時は、彼は覚悟を決めていた。だがそれは声には出さない。

「昨日のことですけれど」

「昨日のこと」

それを聞いて何かと考えた。

「六組の佐藤君に」

「ああ、彼だね」

誰かおおよそ察しはついた。野球部の格好いい少年である。この大学からは有名なプロ野球選手も何人か出ている。生憎高等部の野球は大して強くはないが中等部はそこそこの有名である。

「告白されたんです」

「そうだったのか」

とりあえず自分ではないとわかって内心ほっとした。やはり好きだと言ってきた相手を拒むのは男としてどうかと思うからだ。教師としてはそうしなればならないとしてもだ。そしてこの時修治は教師だった。

「はじめてなんです」

「告白されたのは？」

「はい。そして男の子と付き合うのも」

「それで僕にどうしていいか相談しに来たんだね」

「はい」

華子は頷いた。

「私。どうしたらいいんでしょうか」

「そうだね」

彼は一呼吸置いてからそれに答えた。

「まずは少し様子を見たらどうかね」

「様子を、ですか」

「相手が本気かどうかね。見極めてから」

「佐藤君は本気じゃないんですか？」

「あくまで可能性の一つだよ」

彼はそう断ったうえで述べた。

「男ってのはね。案外曲者なんだ」

「はあ」

男である自分が言うのも何だと思った。だがどうやらこの華子という娘はこうしたことははじめてだ。疎いなどといったレベルではない。ではこう釘を刺しておくのも悪くないと思ったのだ。

「騙したり、嘘をついたり。そうした生き物なのさ」

「怖いんですね、男の子って」

「まあね」

彼は言った。ちなみに彼は相手が男の場合はそのまま男の部分を女に変えて説明をする。男も女も互いを騙すものだ。シニカルなものである。男心も女心も同じもの、所詮は風の中の羽根なのである。いつも変わるものだ。嘘と偽りに満ちたものである。しかしそれを見極めることこそ恋なのである。修治は自分のことはさておき華子にはこう言おうとしていたのである。

「怖いものなんだよ、男ってのは」

彼は真剣な顔でこう言った。

「だからさ」

「それはどうでしょうか」

しかしここで教会の礼拝堂の横の扉が開いた。

「!？」

修治はその開かれた扉に目をやった。するとそこにあのシスターがいた。修治が恋焦がれ、話すらできないでいたあのシスターだ。彼女が今自分の前に不意に姿を現わした。一瞬心臓が止まりそうになった。

第二章

「人は。皆同じですよ」

シスターは優しい声で華子に語り掛けてきた。

「シスタールチア」

華子は彼女を見てこう呼んだ。

「シスタールチア」

修治はそれを聞いてはじめて彼女の名を知った。一度聞くと忘れられない印象的な名前に思えたのはそれだけ彼が彼女のことを思っているからだろう。

「栗脇さん」

シスタールチアは華子に応えて言った。

「人間は。誰しも同じですと」

そしてまた同じことを繰り返してきた。

「皆。ですから心配することはありません」

「そうなんですか？」

「はい。では御聞きしますが貴女は彼のことをどう思っていますか？」

「私ですか？」

「ええ。大事なのは貴女です」

じつと華子の目を見詰めている。優しいが芯の強い目であった。

「貴女が彼のことをどう思っているかですよ」

「どうって言われなくても」

華子は戸惑っていた。修治はそんな華子とシスタールチアの間に入る形になっており、そこから二人を見ていた。そしてそこからシスターを観察していた。

思っていたよりもずっと芯の強い女性であった。可憐な容姿からは想像でできない程強く、凜としたものがあつた。目の光も強いものでありその光を一直線に華子に向けて話をしていたのであつた。

そんな彼女の姿に彼はさらに思うところが出て来た。

だが今は黙っていた。そして二人を見ていた。華子の戸惑いもシスターの芯も同時に見ていた。

「私は」

「どうなのですか？」

「佐藤君のことが」

それから先の言葉は修治にもわかった。それを言わせたシスターの強さに思うところがあつた。

「好きです」

華子は言った。

「彼が私のことを想っているのと同じ位好きです、多分」
「そうですか」

シスターはそれを聞いてにこりと笑つた。目から強い光が消え、優しい光になった。まるで太陽から月に変わったかのようにあつた。

「それでは彼の告白、お受けしますね」

「はい」

華子は答えた。

「明日、佐藤君に言います。貴方のことが好きだつて」
「はい」

つまり両想いなのである。片方が好きただけでは適わないこともあるだろう。だが両方ならば。その結果はもう言うまでもないことである。

「彼も私のことが好きなんて。それこそ嘘みたいですけどね」

「いえ、嘘ではありませんよ」

シスターは月の光りの様な優しい声で言った。本来キリスト教では月はあまりいいものとしては考えられてはいないが修治は今彼女を優しい月の様に思えた。夜の中で彷徨う旅人を照らし、導く月の様に。

「これは。本当のことなんですから」

「はい」

華子は頷いた。

「それじゃあ私からも」

「ええ」

「言います。そして佐藤君の告白、受けます」

「そうです。貴女がそう思われているのならそうなさるべきなのです」

シスターの声がさらに優しくなった。そしてそれは華子だけでなく修治の心にも届いていた。

（大事なものは自分が思っているかどうか）

彼はその心の中で呟いた。

（僕が。どう思っているか）

シスターは今確かにこう言った。そしてそれは彼にある決意を促したのであった。

「有り難うございます、シスタールチャ」

華子は深々と頭を下げて礼を述べた。

「おかげで。決意することができました」

「はい」

（決意）

修治はそれを聞いてまた心の中で呟いた。

（そつだ、決意だ）

呟きながらシスターの方へ顔を向ける。だが彼女はそれには気付いてはいない。

「私、行きます」

「お行きなさい、主の導かれるままに」

「はい！」

最後は強い声になっていた。そしてここに来た時とは全く違う元気な足取りで教会を後にした。そこにはもう迷いは見られず強い決意が感じられた。

こうして華子の相談は終わった。修治が相談を受けた筈だったので何時の間にかシスタールチャの言葉で全てが決まってしまうとい

た。そして彼はこれでこの教会から去ることになる筈だった。

だが彼はとりあえずはそれをしなかった。シスターに顔を向けた。

「あの」

「貴方は」

「この大学の学生でして。教育実習を中等部で受けさせてもらってます」

「そうなのですか」

「シスタールチアさんですよ」

「はい」

シスターは彼の問いに答えた。

「どうしてこちらに」

「中等部で教師を務めておりまして」

彼女は言った。

「教義を。担当しています」

「そうなんですか」

私立の宗教系の学校では必ずと言っていい程その学校の母体の宗教に関して教える授業がある。聖職者である彼女はそれを受け持っているのだ。

「それでこちらにおられたんですね」

「はい。ところで」

シスターはここであることに気付いた。

「貴方は。私のことを御存知なのですか」

「えっ!？」

不意にこう言われて焦りを覚えた。何とか顔には出さないようにしたがそれができているかどうかは甚だ疑問であった。

「といたしますと」

「いえ。こちらにおられると今仰いましたから」

シスターは言った。

「大学におられるようですが。そこでお見かけしたのでしょうか」

「ええ、その通りです」

彼は答えた。

「実は。大学の教会でお見かけしまして」
「そうだったのですか」

「こちらにもおられるので。どうしてかと思ひまして」

「これでも教師の端くれでもありますので」

にこりと笑つてから述べた。

「こうして生徒を導くのも責務の一つであると考えております」
「偉いですね」

素直にこう思った。口から自然とこの言葉が出た。

「そこまで言えるなんて」

「いえ、私なぞはとて」

だがシスターはその言葉には頬を赤らめさせて否定した。

「そんなことは。まだまだです」

「いえ、そんな」

修治はそんなことはないと言つた。

「シスターは。立派だと思ひますよ」

「そうでしょうか」

「今時。そんな立派な教師なんてそうそういませんから」

これは残念ながら本当のことであつた。異常な暴力を振るつたり、偏狭な思想を押し付けようとする教師は実に多い。我が国の教育の病根の一つである。

「自分さえよければいいと考える奴があまりにも多いですからね」

「そういうものなのですか」

「はい。それにしてもあの二人は」

ふと華子と佐藤に考えを向ける。

「どうなりますかね」

「きつと上手くいきますよ」

シスターは全てを信じた声で返した。

「絶対に。神の導かれるままに」

「神の、ですか」

それでは自分も神様に導かれてこのシスターと一緒にになりたいと思っただがそれは口に出すことは出来なかった。まだとても口にする出せなかった。

「それ程御心配でしたら見に行きませんか？」

「見に、ですか？」

「はい、二人がどうなるか。私も御一緒にしますので」

「シスターも」

実はそれに最も心を動かさせられた。華子と佐藤のことよりもシスターと一緒にいられる、そのことの方が彼にとっては重要なことに思われたのである。

「如何でしょうか」

「そうですね」

ここで即答することはしなかった。即答すれば怪しまれると思っただからだ。慎重にいくことにしたのだ。

「シスターさえ宜しければ」

「では行きますか」

シスターはそれを聞いて言った。

「あの二人を見守りに」

「はい、それでは」

内心非常に嬉しかった。図らずもシスターと一緒にいられるからだ。彼は心の中でうきうきとしながらシスターと一緒に教会を出た。そして次の日の放課後大学の教会で待ち合わせた。

「どうも」

「はい」

まずは挨拶を交わした。それから中等部に向かう。

キャンパスを歩きながらあれこれと話をする。自分の横でシスターがいてくれるだけで天にも昇りそうな気持ちになる。しかし今はそれを必死に隠していた。

「あの二人は何処にいるでしょうね」

「そうですね」

シスターは少し考えてから修治の質問に答えた。

「告白が成功しているのならグラウンドですね」

「グラウンド」

「はい、中等部の野球部はいつもそこで練習していますから」

それがシスターの返事であった。

「行きましょう」

「はい」

修治は気分よくグラウンドに向かった。見ればシスターの言う通り中等部の野球部がそこで練習していた。そして観戦用のベンチには華子がいた。そこに座って練習風景を見ている。

「ほら」

シスターはそれを見てから修治に顔を向けた。

「おられますね」

「ええ」

ということとは華子は佐藤と交際をはじめたということである。その証拠に彼女は佐藤から目を離していなかった。

「まさかとは思いましたけれどね」

「全ては神の思し召しです」

胸にかけてあるロザリオを軽く握って言った。

「栗脇さんと佐藤君のことは」

「神の思し召しですか」

修治はそれを聞いてまた何かを決した。

「恋は神の思し召しなんです」

「その通りです」

シスターはにこりと笑って頷く。あの優しい笑みであった。

「人が人を好きになるというのは素晴らしいことです」

「そうですね」

修治もそれを聞いて頷いた。

「全く。その通りです」

「けれどそれが何か」

「シスター」

修治はあらためてシスターに顔を向けてきた。

「はい」

「実は貴女に御会いしたい方がおられました」

「私にですか？」

「はい、明日大学の教会で。三時半にです」

彼は言った。

「その時間に御会いしたいとのことですが。宜しいでしょうか」

「ええ、まあ」

シスターは何が何かわからないといった顔で応えた。どうやら彼女は他人のことはともかく自分のことには極めて鈍感なようであった。

「私なぞで宜しければ」

「ではお願いしますね」

「はい」

修治はここまで言い終えて内心かなり汗をかいていた。精一杯の勇気と覚悟を以って彼女にこう切り出したのである。これを言わせたのは他ならぬシスタールチャア本人であったが言ったのは彼である。言わなければ話ははじまらない。はじめるには勇気がいる。その勇気を与えてくれたのが彼女自身であったのだ。

（明日だ）

彼は心の中で呟いた。

（明日で全てが決まるんだ）

「あの」

シスターはまだ何が何かわからないという顔であった。

「私なぞで宜しいのですね。牧師様ではなく」

「はい、貴女です」

修治は強い声で言った。

「貴女でなければ駄目なのです」

「わかりました。私なぞでよければ」

そこまで言われて引き受けないシスターではなかった。こくりと頷く。

「その方にお伝え下さい。明日の三時半に教会でお待ちしています」と

「はい、ではその様に伝えておきます」

「お願いしますね」

やりとり自体は何の変遷もなく進んだ。だがシスターは修治が何を考えているのかも自分が彼にどう思われているのかもわかりはしなかった。わかつているのは修治だけであつた。

彼はシスターと別れると早速明日への準備をはじめた。念入りに風呂に入り、一張羅を出して髪を切り、そして香水をかけて赤い薔薇の花束を買つて。全ての準備を整えたのであつた。

「人が人を好きになるのが神様の思し召しなら」

三時半が近付いて来る。彼はその赤い薔薇の花束を持って教会に向かう。

「言ってみてもいいよな。そして」

顔を教会に向けた。

「神の御加護を御祈りしよう」

そう呟いて教会に入つて行つた。そして自分の恋に向かうのであつた。

シスター 完

3・25

2006・

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8025a/>

シスター

2009年3月1日14時14分発行